

# 戦後の能楽に対する検閲資料

——「能」もしくは伝統演劇——

マートライ・ティタニラ

## はじめに

太平洋戦後のアメリカ占領下の歌舞伎検閲については広い範囲で知られている。ジェームズ・ブランドン氏鈴木雅恵訳「歌舞伎を救ったのは誰か? —アメリカ占領軍による歌舞伎検閲の実態」(『演劇学論集 紀要』42、2004年)、岡本嗣郎氏「歌舞伎を救ったアメリカ人」(集英社文庫、2001年)、またブランドン氏「A Story of Kabuki during American Censorship, 1945-1949」(Asian Theatre Journal, 2006 Spring)など、日本語でも英語でも数多くの論文などが発表され、現在まで歌舞伎の検閲の調査が盛んである。それに対し、能が進駐軍による検閲の対象になった事実はほとんど知られていない。しかしながら、棚町知彌氏のご指導により、筆者は謡曲に関する検閲の形跡を示した資料に接し得た。以下該資料を紹介検討したい。

## 【アメリカ占領下の検閲の組織】

太平洋戦争の終戦後、ダグラス・マッカーサー元帥の下で検閲を含む占領制度が出来た。検閲制度に関し、『メリーランド大学所蔵プランゲ文庫展記念図録』(2000年)で次のように書いてある。

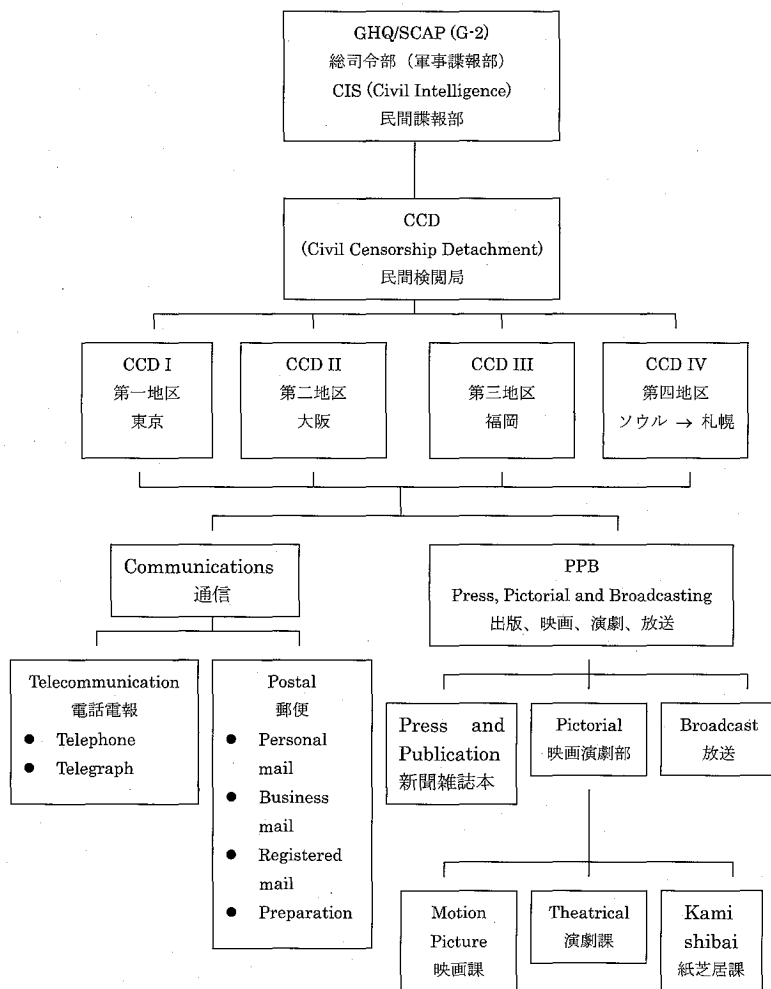
検閲を担当したのは、GHQの参謀第二部(G-2)および民間検閲局(Civil Censorship Detachment)で

あった。CCDは、本来軍事作戦上の情報部隊であったが、出版・演芸・放送課(Press, Pictorial and Broadcast Division)を新設し(後略)

G-2(軍事諜報部)にコントロールされたCCD(Civil Censorship Detachment、民間検閲局)は、民間の通信を支配した。発行物、映画・演劇の台本などはCCDへの提出が義務付けられた。終戦直後、日本は三つの地区に分けられ、東京は第一地区、大阪は第二地区、福岡は第三地区の中心となった。さらに、1948年に元々ソウルにあった検閲局が札幌に移動され、第四地区が出来た。CCDとCCD第一地区の両方が東京にあり、別の機関であっても、実質的には一体で活動した。CCDの下は通信部とPPBの二つの大きな部局があった。通信はさらに郵便と電話電報の二つの“課”に分けられ、CCD全事務員の80パーセント以上がこの通信部に雇用された。CCDの約七千人の事務員のうち、千人ほどが配属されるPPB(Press, Pictorial and Broadcasting、出版、映画、演劇、放送)には、Press and Publication(新聞雑誌本)、Pictorial(映画演劇部)、Broadcasting(放送)の三つの部がある。そのうち、Pictorial部はさらに、映画・演劇・紙芝居の三つに分けられる。最近よく研究されるプランゲ文庫はPPBのPress and Publication(新聞雑誌本)の出版物のコレクションである。



図：大阪事務局の写真——横手一彦氏所蔵



図：検閲の組織

以上の各部門は完全に隔離され、防諜上の要請から部門間の連絡はなかった。もちろん当時の日本の民間がこの構造と活動内容について知るはずはなかった。

### 【検閲について】

能の検閲制度については今までほとんど発表されておらず、能・狂言の検閲はなかったというのか定説であった。例えば横道萬里雄氏は戦中戦後の検閲の有無についての筆者の質問に対し「米軍占領下の検閲について、(中略)歌舞伎の場合と違って、能では、検閲の実質的影響は皆無だったと考えております」<sup>(1)</sup>と答えておられる。またブランドン氏の「歌舞伎を救ったのは誰か？」でも次のように述べられている：

演劇検閲官は、プロ・アマチュアを問わず、あらゆるジャンルの演劇の公演を「統制」する権限を与えられていた。しかし、狂言・神楽他の古典演劇の公演や祭儀的な公演は、主として観客が少ないという理由から、検閲対象から除外されていた。歌舞伎は人気があり、目立った演劇形態だったから、重要な検閲対象になっていた<sup>(2)</sup>。

同じブランドン氏の論文では歌舞伎の検閲の仕方につ

いて以下のように論じられている。

歌舞伎の制作者たちは、上演予定の芝居の台本をすべて提出することを求められ、検閲支隊で、日本人の翻訳者が演劇基準にひっかからないかどうか台本を読んで確かめ、アメリカ人の検閲官に見解を述べて判断を仰いだ。アメリカ人の検閲官は、その台本に許可、不許可、削除つき許可、という三通りの判断を下した。許可には「CP」(検閲通過)という判子がおされ、日付とともに検閲官の名前またはイニシアルが記された。判子が押された台本は許可が下りた証として制作者に返され、そのコピーが検閲支隊にファイルされた。削除の対象になったのは、通常は単語や数行の表現で、基本政策として、一つの場面や一幕をまるごと削除させる、ということはしなかった。そして、これは重要なことだが、検閲官には、場面の書き直しを命じることは禁じられていた<sup>(3)</sup>。

検閲へ提出すべき資料や手続きについて「しばる暦(四)」(『演劇界』1946年1月号)に次のようにある。(旧字体は新字体にした。)

今後、各劇場で上演する脚本は初日二週間前に、英文に依る筋書一部、一週間前に和英両文に依る台本各二部を、米軍民間情報教育部に提出するやう指示があった。検閲を受けた脚本は筋書変更は許されない。もし変更する場合は、情報教育部リース大尉の許可を必要とする。万一許可を受けずに変更した場合は上演を停止されることがある。また東京で通過した台本は東京以外の土地でも有効である<sup>(4)</sup>。

しかし、ブランドン氏は前提論文中の注10でこの記事につき、以下のように指摘された。

興行者はCI & E<sup>(5)</sup>およびCCD<sup>(6)</sup>の両方に梗概を送ることを要求されたが、実際には、CI & Eは受け取った梗概を検閲せず、CCDだけが検閲を行った。ここでのCI & Eへの言及は、恐らく、『演劇界』に掲載するために翻訳した際、生じた間違いであろう<sup>(7)</sup>。

ブランドン氏は今年発表された論文で次のように述べている。

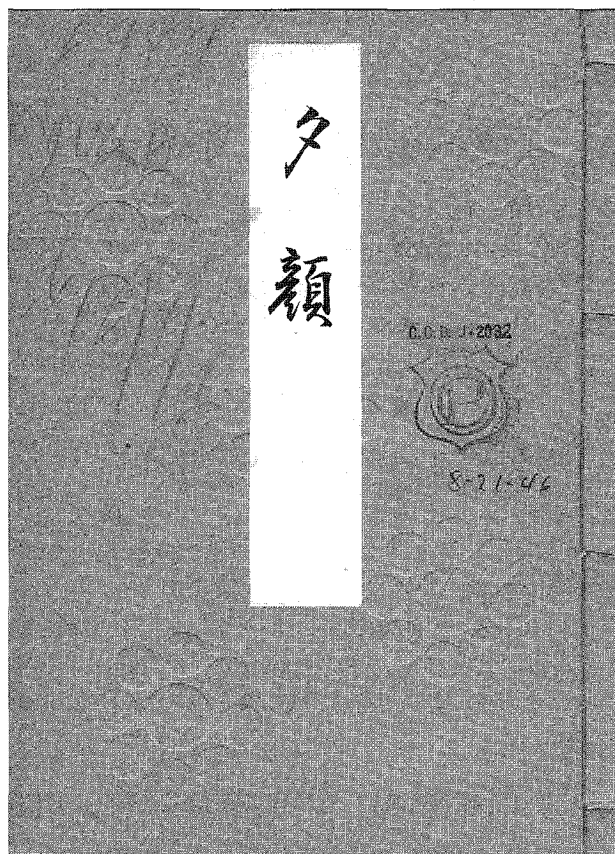
演芸検閲官は演芸のプロとアマチュアの上演を含めて全種類を監督するように指示された。実際には、特に観客が少ないことにより、能、狂言、舞楽やその他の古典的、また儀式的な演技は免除された。歌舞伎はひんばんに上演され、多くの観客に鑑賞され、その上封建的な内容があると認識されたので、検閲官にとっては重要な演劇様式であった<sup>(8)</sup>。

しかしながら実は能についても検閲が試みられたことがあったらしい。例えば前西芳雄氏が紹介された「あとがき」<sup>(9)</sup>によれば、検印の押捺された金剛流謡本が現存する。そしてその実態を裏付けるのが、以下の本論で紹介する資料なのである。

また、演能そのものというよりは、実際には謡本の検閲の形も取ったらしい。前西芳雄氏の『金剛』の記事によると、能の検閲についての話はなく、当時検閲で許可された謡本について以下のように説明する。

この検閲用本は、後年東京檜書店で、他の不用品などと共に廃棄し、回収者待ちで屋外に出されていた折、これは珍しいと店に断って買った人があった。転じて私が買ったのは平成になってからで、初めて検閲の事実を知ったのであるが、最早その間の事情を知る人は少なく、室生流はどうであったか、わんや書店の藤城継夫氏にお尋ねしたが、検閲の有無は知らないし、江島伊兵衛氏からも、そのような話は聞いた事が無いとのことであった<sup>(10)</sup>。

図に見えるように、謡本の表紙に赤い鉛筆で6489、曲名がローマ字で記され、6/8/46の日付、また検閲通過



図：謡本の表紙の写真

のC.C.D.J-2032号の「CP」のスタンプが押され、その下は手書きで8-21-46の日付が書いてある。この謡本（夕顔）は表紙以外には何も書き加えられていない。前西氏は「六千番台の番号は謡本だけに限っていないことは確かである。昭和20年8月15日は終戦なので、46年はその一年後の実施である。刊行物としてか、上演物の台本としてか、どちらが対象かは知らないが、多分後の方であろう。」<sup>(11)</sup>と指摘されてもいる。面白いことに、「夕顔」の謡本も、前西氏が『金剛』で紹介された「江口」の謡本の写真も同じように1946年の夏の検閲であり、それは本論で紹介する資料の作成時期の直前なのである。尚、写真掲載に当たっては、前西芳雄氏に便宜を計って頂いた。記して御礼申し上げます。

#### 【目標】

本論文で紹介するのは「No” Play (Classic Drama)」と称される資料である。これは2004年に90歳で亡くなった林裕三氏の遺産の一部である。林裕三氏は、同志社大学予科を中退し、映画の道に進んだ。京都JO映画で渡辺邦男の助監督となり、戦時中は、シンガポールに軍属として出征、敗戦とともに英軍の捕虜となり、1947年復員した。舞台芸術についても詳しくことからアメリカ占領時、1947年～1948年に大阪を中心とする第二地区検閲局の出版・演芸・放送課（PPB = Press, Pictorial and Broadcasting Division）の日本人スタッフとして勤め、1948年12月大阪の検閲の廃止、東京への集中後、民間検閲局<sup>(12)</sup>（CCD = Civil Censorship Detachment）の

助言者となった。占領が終わってから複数の資料を保存し、亡くなるとその資料の殆どは焼かれた<sup>(13)</sup>。だが、その中で、残存するものの一部を今日棚町知彌氏のご厚意により、閲覧の機会を得た。以下にその資料について論じていく。

先ず151ページある本書類の構成、成り立ちなどについて論じたい。その後、代表的なところを翻訳して例をあげながら、内容を分析し、間違い、注目の傾向について考えていく。最後に、以上の情報を通じて、だれが、どのように、どんな資料を基に作成したかなどについて意見を述べたい。

### 1. 「No” Play (Classic Drama)」に関して

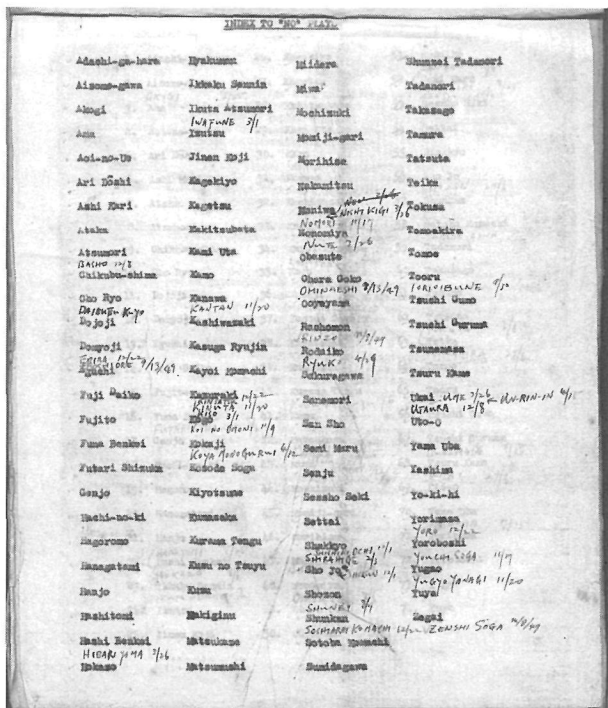
本資料は、薄手の紙にタイプライターで打ったもの(後述のように恐らくはカーボンコピーであろう)と、手書きのものがある。大多数はA4縦型フォーマットで、上は大きめの金具でとめてある。表紙は他の紙よりやや厚紙で中央上に「No” Play (Classic Drama)」と手書きしてある。表紙を含めた153枚の構成は以下のようである。

全丁		153枚
内訳	表紙、裏紙	2枚
	目録	2枚
	能についての説明	1枚
	作品についての解説	148枚
A4	76枚	
A5	54枚	
B5	15枚	
小さな紙	3枚	

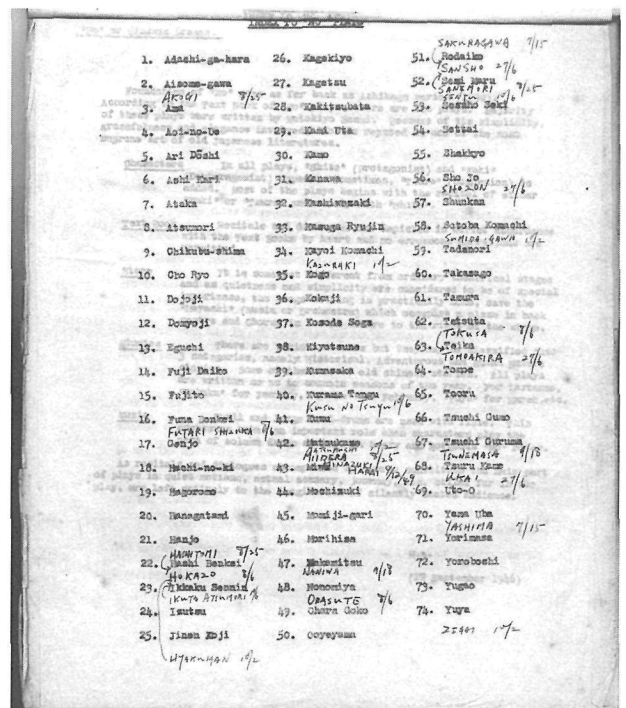
以上の151ページの資料は日付順ではなく、英語のアルファベット順であるため、完成された後、ファイルされたはずだ。さらに、解説は一枚一曲の形になっているが、「松風」「通小町」「班女」「鉄輪」の四曲は一枚に纏めてある。また、この四曲だけは二回もファイルに載せてある。この四曲は最も早く、1946年10月1日に、三枚の小さな紙(A4の紙から切ったものだろう)は最後に1949年9月12・13日に作成された。B5の資料の内の狂言千鳥と鳴子は同じ紙の表と裏になっている。B5の場合、このように一枚に二曲の解説がある資料もある。B5版の資料はすべて日本語手書きの解説で、15枚の中に能は12曲、狂言は6曲を収める。

### 【能楽目録】

表紙の次に二枚の目録がある。「能楽目録」(Index to “No” Plays)の見出しで、一枚目(以降:目録1)は1947年6月13日付、二枚目は(以降:目録2)四ヵ月後1947年10月16日付である。目録1には印刷で74曲が記されるが、手書きで26曲のタイトルが追加され、合計100曲の目録となっている。目録2には、印刷で102曲が示され、手書きで31曲が補われており、合計133曲の目録である。目録2は、目録1の印刷された曲目を全て踏襲した上で、目録1で手書きされた曲名を印刷にして補っている。ただし、目録1で手書きされていた「水無月祓」だけは目録2に載せられていない(これについては、後に論じたい)。目録の後、能の簡単な紹介、続いて曲毎の解説となる。この解説は基本的には目録2に基づいているが、「羅生門」だけは目録に記載があるにもかかわらず、解説がない。逆に「皇帝」、「水無月祓」、「吉野天人」は目録に記載はないが、解説がある。



図：目録1



図：目録2

目録にある曲名は全て、日本語の曲名をローマ字化したもので、英語のアルファベット順に並べてある。目録の順序と解説の順序は基本的には一致しているが、一部順不同になっている所がある。

### 【流派に関して】

これらの曲目は、能の場合観世流の演目を、狂言の場合和泉流の演目を基に、収録したと推測できる。

先ず第一の根拠として、収録全曲を含む流儀は観世流しかない。また、曲名も観世流の曲名による。つまり、「黒塚」ではなく「安達ヶ原」、また「満仲」ではなく「仲光」などと記される。事後に説明書に手書きで記入される曲名は、「賀茂」・「熊野」などのように観世流の表記で書かれていることが多い<sup>(14)</sup>。しかし、文字使いに一貫性のない場合もある。観世流が「玄象」なのに、「玄上」とあり、「白鬚」ではなく「白髭」で、「経正」ではなく「経政」と書いてある。また「ヤシマ」の場合、観世流で「屋島」と示し、観世流以外の流派では「八島」という書き方になっているが、本資料では「八嶋」のように記入されている。

また「神歌」という曲名も解説の中で出てくる。「神歌」とは能曲の曲名ではなく、「《翁》(《式三番》)の謡の詞章」<sup>(15)</sup>であるのに、他の能曲と同様に曲名として示され、説明される。ただし、観世流の「翁」の謡本も「神歌」の曲名になっている。

第二の根拠として、「望月」の解説がある。以下の注記で「主要な眼目は「石橋」に類似の獅子舞である。復讐の場面はなく、ワキは獅子舞を踊りながら退場する。」<sup>(16)</sup>と記述される。しかし、この説明は観世流・宝生流の場合にしかあてはまらない。「上掛りでは最後にワ

キは笠を残して切戸口から退場し、シテと子方はその笠に斬りつけるが、下掛りではシテがワキの胸元をとって小刀で刺す写実的な演出がある。」<sup>(17)</sup>と「能・狂言辞典」で解説され、本資料は上掛りであることが明らかである。

さらに、狂言の場合、「鳴子」以外は和泉流と大蔵流の両方の演目に含まれる。「鳴子」は和泉流独自の演目である。

135曲の能曲と6曲の狂言はもちろん観世流と和泉流のプログラムにある曲の全てではないが、最終的には全曲分を作成する予定だったのであろう。しかし、すべての作品の目録化は完了せず、実際には全演目の検閲も実現しなかったようである。

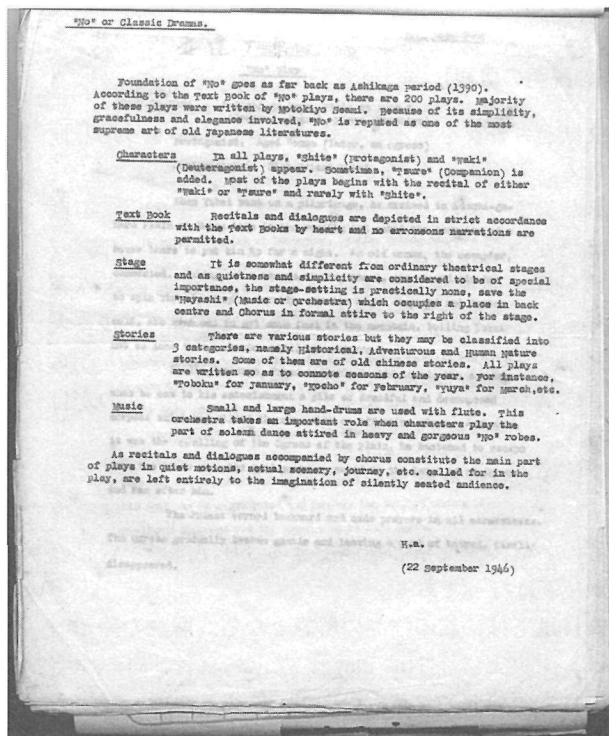
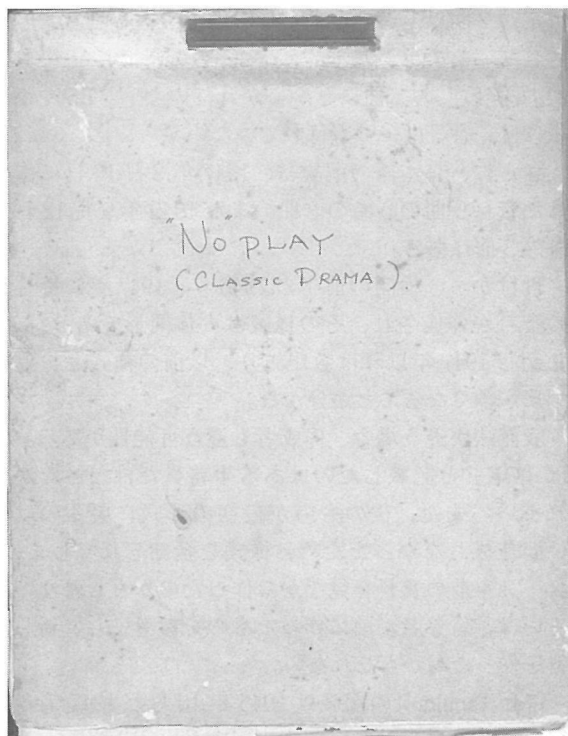
### 【能の紹介】

三頁目は、能についての簡単な英語での説明である。内題は、「“No” or Classic Dramas.」となっている。その説明は以下の通りである<sup>(18)</sup>。(英語での言葉遣いを見せるため、所どころ元の単語を括弧で残しておく。)

“能”あるいは古典的な戯曲。

能の成り立ちは足利時代まで(1390年)遡る。Text Book of “No” Playsによれば、200曲がある。その大多数を世阿弥元清<sup>(19)</sup>が書いた。その質素さ、優美さ、上品さから、“能”は日本文学の最も優れた芸能として評価されている。

登場人物：全曲で“シテ”(protagonist)と“ワキ”(deuteragonist)が登場する。時には“ツレ”(companion)が付け加えられる。曲の殆どは“ワキ”か“ツレ”のいずれかの言葉で始まり、“シ



図：“No” or Classic Dramas. (表紙と冒頭の説明)

テ”の言葉で始まるものはめったにない。

**謄本 (Text Book) :** テキストを厳しく守りながら、暗記した独白と対話を語り、誤った語りは許されない。

**舞台 :** 普通の劇場の舞台とやや異なる。静寂や質素さが特に重要であるため、大道具は基本的にはなく、“ハヤシ” (music or orchestra) は後ろ、正装をしている地謡 (chorus) は舞台の右を占める。

**物語 :** 様々なストーリーがあり、三つの種類に分ける。要するに歴史的 (historical)、冒険的 (adventurous)、人情的な (human nature) 物語である。その中、中国種の古い話もある。全曲に季節感がある。例えば、「東北」は一月、「胡蝶」は二月、「熊野」は三月など。

**音楽 :** 小鼓・大鼓 (small and large hand-drums) は、笛と共に使われる。役者が重くて素晴らしい“能”ローブで荘重な舞を舞うとき、重要な役割を果たすオーケストラである。

独白と対話にコーラスが続き、曲の殆どは静かなしぐさで演じられる。実際の風景、旅行などの描写は、静かに座っている観客の想像力に任せられる。

H. a.

(22 September 1946)

この資料作成者は能の専門家ではないであろうことは、能の種類を三つとしていて、楽器の数を小鼓・大鼓・笛のみとしていて、太鼓を入れていないことなどの不正確さから明らかである。後に掲げる資料にも同様の間違いが散見し、作成者が一人であったか複数であったか確証はないが、いずれにせよ能とはあまり縁のない人物ではなかろうか。

#### 【曲毎の説明の概観】

百枚以上の資料を見ると、作成者は日本人だったと推測される。英語の綴りのミスや文法的な間違いが多く、母国語が英語である人が使わない複雑すぎる表現、不自然な英語使いなどが多いことから、その可能性が高い。当時の民間検閲支隊 (CCD) で働いた労働者の組み合わせを見ると、アメリカ人であったのは上司で、残る人数の九割ぐらゐは英語が出来る日本人であったことから<sup>(20)</sup>、本資料は日本人によって作られたと考えるのが自然だろう。

残念ながら、作成者の名前、読めるサインはどこにもない。冒頭の能についての説明と12番能の作品解説の作成者の名前の頭文字と推測できる「H. A.」<sup>(21)</sup>が資料の右下か左下に打ってある。

四枚目以下は、能の作品の解説となる。解説の殆どの形式は、中央上に「No Play」、左上に日付、ローマ字表記の日本語の曲名、英訳の曲名、季節、場所、登場人物、内容が書いてある。作者は「昭君」以外は記載がない。15曲のみ、最後に注記がある。(作者、注記につい

ては以下で論じる。) 日本語の曲名は手書きで書いてあるが、日本語の曲名を欠くものもある。

日付の書き方は、二通りあり、日・月・年の順と、月・日・年の順とがある。最も多いのは、イギリスで使われる形である日・月・年の順で、月は文字 (August など) で書いてある。しかし、一部はアメリカで使われる形、月・日・年の順となっており、それはすべて数字となっている (例えば、「3/26/48」など)。

なお、B5版のページに見える狂言6番は全て日本語で、すべて手書き、縦書きで次のように書かれている。「狂言棒縛」、「狂言千鳥」、「狂言鳴子」、「狂言蝸牛」、「狂言狐塚」、「狂言泣尼」。

また同じくB5版の分の12番の能もすべて日本語、手書き、縦書きで書かれている。「烏帽子折」、「羽衣」、「花筐」、「小鍛冶」、「高野物狂」、「高砂」、「水無月祓」、「女郎花」、「鶴亀」、「殺生石」、「田村」、「熊野」。この12番は、英語による解説も有する。

#### 【資料にある補筆】

補筆はすべて、所蔵段階のものではなく、検閲の過程での補筆である可能性が高い。手書きで補筆されているのは、日本語 (漢字) の曲名、整理番号のようなもの、「Mr Tanaka」<sup>(22)</sup>、ならびに「OK」<sup>(23)</sup>の四種類である。

日本語 (漢字) の曲名については、ほとんどすべてのものに付されている。これは、資料を一見して作品名がわかるようにするため、便宜的に付されたものであると考えられる。

番号は、64番分の曲に付されているが、それは1~64まで順に付いているのではなく、3~196までの数字に欠番があったり、重複したりしながら64番の曲目に付されているものである。また、曲名同様、別曲に同じ数字が2回以上数字が書かれる場合もある<sup>(24)</sup>。番号が付されているのは、基本的にはA4の資料で、A5では「難波」「経政」の二曲にしか書かれていない。B5や小さな紙には、番号は一つも付いていない。

さらに、日本語の解説は、1947年2月10日に作成された資料9曲のうちの8曲、また1949年9月12日・13日の3曲にある。

日付から、検閲の前半の1946年、1947年に毎月複数の資料が作成され、その様式は大体同形であったこと、しかし1947年以降は数が減り、以前の様式と一致しない形が多くなることが分かる。

表記法が違う場合、作成者も違う可能性がある。例えば「OK」と記載したのはある事務員だけだったかもしれない。また、後のものが最初の形式に戻るの、長い間作成しなかったため、様式を全部忘れてしまって、2・3年前の資料を見ながら作ったのかもしれない。あるいは、新参加者が前に作ったものを参考にし、新しい資料を作ったのかもしれない。

「Mr Tanaka」の記載は1946年10月と1947年3月の資料にしか見られないので、田中という担当者がその時期に検閲官として働いていたと推測できる。また、担当

は交替で行われたことも考えられる。

### 【認可印について】

「CP」(Censorship Passed 検閲通過)を意味する印が押された資料は「烏帽子折」、「水無月祓」、「七騎落」、「昭君」の四曲である。「烏帽子折」と「水無月祓」の解説は、日本語も英語もあり、「CP」の印は和文、英文両方の資料に押されている。「水無月祓」の和文資料に押された印の下には、手書きで「12. Sept. 49 Y. h.」とも書かれている。「七騎落」と「昭君」の場合は、英文資料しかなく、「CP」の印の他、日本語で「許可」と明記された印も押され、その下にはサインのような手書きもある。

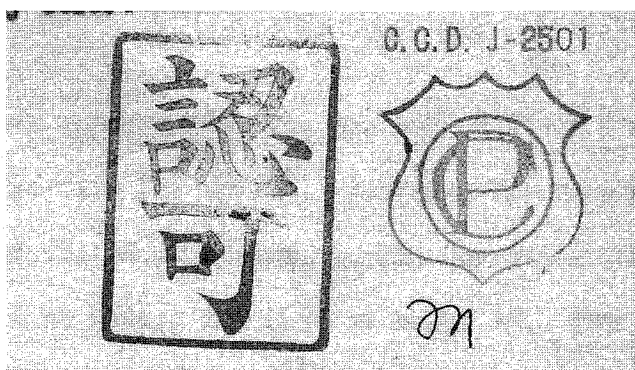
右の四曲中前の二曲と後の二曲、二曲ずつに同じ印が押される。前者は「CP」の上に「C.C.D.J.-12691」、後者は「C.C.D.J.-2501」となっている。

各検閲官は各自固有の番号がついた「CCDJ」(日本民間検閲支隊)スタンプを所持していた。(中略)実際には、彼らは互いにスタンプを利用しあっていた<sup>(25)</sup>。

それに、前述の「七騎落」と「昭君」の他、「高野物狂」の場合もサインのようなものが見える。「七騎落」と「昭君」は似ているので、同じ人のサインかと推測される。「高野物狂」の場合は、資料の右下にある手書きで、実際のサインかどうか疑われる。

検閲上禁止されたものの場合「禁止」のスタンプのようなものはなく、「許可」の印が押されないだけである。従って、許可されるものは、「CP」の印があり、認められない曲は何も印がないことが多い。しかし、以上の四曲以外の、無印の曲が禁止されたとは信じがたい。東京では戦争直後、染井能楽堂、多摩川能楽堂、杉並能楽堂の三ヶ所の舞台しか残らなかった。しかし、頻度は少なくとも、能の演奏は東京でも、大阪でも、その他の地方でも行われ、紹介した上記の資料に許可の証拠となる「CP」印がなくても、実際に許可されてないわけではなかったはずである。

ちなみに、歌舞伎がそうであったような、能の一部に



図：認可印

訂正を迫られたと推測させる徴候も見えない。つまり、作成した資料の全てがチェックされたかどうか疑問なのである。歌舞伎を救ったと言われ、当時検閲支隊東京地区の演劇課課長であったファビアン・バワーズ氏は1984年のノーフォークのシンポジウムで「能と文楽は[歌舞伎ほど]気に留められなかった。文楽の封建的な場面は検閲されたが、そのような芸能は実在しない人形によって演じられた。能は人々が理解できないほど古典的であったため、誰も気にしなかった。」<sup>(26)</sup>と述べた。同じシンポジウムでデイビッド・G・グッドマンは「占領に関する限り、能と文楽は問題がなく、単に無視された。一方、歌舞伎は日本人の再教育に対する邪悪な脅威と見なされ、それ故占領軍は歌舞伎を厳しく取り扱った。」<sup>(27)</sup>と指摘した。

### 【日付による傾向】

ここまでは、資料の元々の順番を守りながら調査した。以下はアルファベット順ではなく、日付から見ていこう。

先ず前述した二枚の目録にある日付から始めたい。両方とも、タイプの曲名と、行間に補った手書きの曲名が並んでいる。目録1・2とも手書きの曲名の横に同じく手書きで日付も書いてある。この日付はほとんどの場合、曲毎の説明にある情報と一致する。しかし、後の説明に日付のないものもあり、それらの資料の作成時については、この二枚の目録に書いてある情報からしか推測できない。さらに、日付が合わない場合もあるが、一、二日間のずれしかない。(この違いの意味は解説にある日付は作成日で、目録にある日付は受領日なのであろう。)

1947年6月13日の日付で作成された目録1に後から記入された25件の曲名を見ると、その全ての横に日付が見える。今回はほとんどの場合は月と日しか示されておらず、年は不明である。が、後の説明と比較すれば、月も日も合っているので、年も同じに相違ない。違う点は、次の三つであった。「水無月祓」は、目録に日付はあるが、後に続く説明書にはない。「姨捨」と「桜川」の場合は、日付の若干の違いが見えてくる。「姨捨」は説明書には1947年8月5日とあり、目録に記入されるのは一日後の8月6日である。「桜川」の場合、目録には7月15日とあり、資料では1947年7月13日と二日前の日付である。

目録1にある日付は、「水無月祓」を除き、全ては1947年の年号であるはずで、最も早いのは6月27日(「正尊」、「知章」)、最も後に記入されたのは10月6日(「生田敦盛」、「楠露」、「千手」)である。また、「水無月祓」は、1949年9月12日の日付で、目録1にあるのは実はおかしい。つまり、「水無月祓」を別とすれば、全ての記入は目録1の1947年6月13日と、目録2、つまり1947年10月16日の間に補われたはずだと思われる。

目録2の場合も、目録1と同じく事後記入された曲名の横にある日付は目録の作成日を示す1947年10月16日より後の日付となっている。早くても、10月16日の一ヶ月ほど後の11月17日(「野守」、「夜討曾我」)で

ある。最後となったのは1949年9月13日の「烏帽子折」と「女郎花」である。ということで、一日前の1949年9月12日付の「水無月祓」は、目録2が見つからないなどの理由で偶然に目録1に書かれてしまい、目録2に「水無月祓」がないという結果を生んだのだろう。

さらに、目録に書いてある日付を含めれば、ほとんどの資料の作成日（または、受領日）が明らかになってくる。年月日が分らないのは、日本語だけで書いてある資料である。英語資料の中で年がはっきり分らないのは、年のない11月9日に作られた「恋重荷」しかない。

これらの資料が検閲のために最初に作成されたのは、1946年10月1日<sup>(28)</sup>、つまりアメリカ占領軍による検閲開始の一年後であった。（能の説明書はこの日より早く、1946年9月22日付であった。）最後は、検閲が終わる直前の1949年9月12日と13日<sup>(29)</sup>の資料である。解説書の大半は検閲の時期の前半に作成されたようだ。1946年10月から1947年にかけて、毎月複数枚の解説が作られ、同じ日付のものが少なくない。従って、作成のときは、いっせいに5～10曲も取り扱われたようである。しかし、1948年に入ると、資料の発行も、数も減り、1946年10月から1947年末までの15ヶ月間に112曲分の資料が作られたのに対して、1948年の初めから1949年9月までの21ヶ月には24曲分の解説しか発行されず、一枚ずつ作るようになったらしく、以後は何ヶ月間も解説が作成されないことすらあった。

検閲で許可印のあるものは、上で述べたように二つ二組み、合わせて四曲である。「七騎落」と「昭君」は両方とも1948年1月12日に作成された。その日はこれら以外の解説は作られていない。また、「水無月祓」は翌年1949年9月12日、「烏帽子折」は次の日、最後の日付である13日だった。同じく1949年9月13日に作成された「女郎花」には許可のスタンプが押されていない。こういうことで、二曲ずつ同じスタンプで、多分同じ検閲官により許可されたわけである。ようするに、許可されたわずか四曲の資料は1948年以降に作られたようで、許可印のある分の日付も検閲が歌舞伎などの他分野で厳しくなる時代からである。そしてこの四曲以外のはどうなったのかという問題がある。あるいは、これらの資料はコピーで、実際にチェックされたオリジナルは散逸してしまったのだろうか（「阿漕」の解説に部分的に鮮明なタイプ箇所があり、その他の部分は他の曲の紙面と同じ鮮明度なので、多分すべてがカーボンコピーなのであろう）。もしそうなら、この四曲の分は偶然、または間違っただけでオリジナル資料がコピー資料に混入してしまったのだろうか。

またさらに、上で述べた記事を時間通りに並べると、ある傾向が見えてくる。“Mr Tanaka”の記入は1946年10月14日と25日の説明書の大半と、1947年3月6日の資料だけである。“OK”は、1947年6月と9月の間に発行されたものの一部にしかない。“H. A.”の名前の頭文字と推測されるのは、最初の日付である説明書以外は、

間が空き、1948年以降となっている。それに、次の章で翻訳をあげる注記は、1946年11月と1947年12月の間に出来たものである。

しかし、残念ながら、後から補ったらしい手書き数字（前述）の順序の仕組みは、資料をアルファベット順で調査しても、日付順で調査しても、分からなかった。これらの曲名番号は、無作為に付されたものであるかのように思えるが、作成年月日と照合すると、一つの傾向が浮かび上がる。それは、番号が付されたものは、1946年に集中しており、1947年は、1月、2月10日に作成された9曲のうち1曲と、3～5月であり、以後、1947年の9月18日の2枚、1949年3月31日と9月12日の3枚あるのみである。面白いことにこれらの1949年の曲は目録にもない「皇帝」と「吉野天人」、ならびに目録1に偶然に記入された「水無月祓」である。（【日付によるチャート】参照）

#### 【原資料に見える注記】

十五曲については粗筋以外に注記も追記されている。「N.B.」（ラテン語のNota Beneの省略）か「Note」で始まり、粗筋に続いて二・三行の説明がされている。「高砂」などのように習慣的な背景、「蟬丸」「望月」などのように内容以外の情報をあげる例が多い。以下の通りである。

「張良」：忍耐を教える中国の話から取られた能である。

“This “No” is taken from a Chinese story and teaches man’s patience.”

「花筐」：戦争中日本の政府により禁止された能である。

“This “No” play was suppressed by the Japanese authorities during the war.”

「一角仙人」：主な目的は舞である。一角は女の舞を好奇心から見始め、徐々に興味が出てきて、自分も舞い始める。

“The chief aim of this “No” play is dancing. While Ikkaku watches the woman dance with some curiosity at first, he gradually takes interest in it and starts dancing.”

「岩船」：祝賀のイベントに幸運を祈る為に演じられる能である。

“This “No” is played on congratulatory occasions to connote good luck.”

「金札」：普段は祝賀の時に演じられる能である。

“(This “No” is usually played on the occasion of congratulatory event.)”

「木曾」：この能のクライマックスは願書の場面である。音調に注目すべき。

“Climax of this play comes at the recital of “Gansho” (Written Petition) where careful tact is required in intonation.”

「望月」：主要な眼目は「石橋」に類似の獅子舞である。復讐の場面はなく、ワキは獅子舞を踊りながら退場する。



"The chief aim of this "No" play is Lion's dancing, resembling to that of "Shakkyo".

No commission of vengeance is displayed on the stage and the Deuteragonist makes his exit while Lions dance is in full swing."

【仲光】：役者が直面で登場する珍しい能。このようなものは、二百曲のうちに十曲ぐらいしかない。武士道の忠臣を現す最も悲劇的な能の一つである。

"This is one of the "No" plays in which characters appear without masks. Such "No" Plays are about 10, out of 200 plays. This "No" is one of the most serious plays in which themes adapted to represent pathetic loyalty in the Bushido spirit."

【三笑】：中国の古典文学の「虎溪三笑」から取られた曲と推測される。設定された筋がなく、三人の老人の舞が主眼である。

"This play is said to have been taken from the Chinese classical literature of 'KoKei San Sho'. There is no definite plot and the chief aim is the dancing of 3 old men in a secluded environment."

【蟬丸】：天皇家への侮蔑にあたりと考えられたため、戦争中に禁止された。

"Public performance of this play was prohibited during the war as it was thought derogatory to the dignity of the imperial family."

【石橋】：見所は獅子舞である。

"The chief aim of this "No" play is lion's dancing."

【高砂】：夫婦の調和、長寿、平和を祝う能である。曲の一部は結婚式にもよく演奏される。

"This No" denotes the harmony of man and wife, longevity and peace. Part recital from this play is customarily made on occasions of marriage."

【定家】：代表的な能である。筋は僧が歴史的な遺跡を訪問し、幻想を見るという夢から成る。美しい霊の舞を見、妄想はやがて消えてしまう。

"This "No" is typical of the class. The story is supposed to be a dream in which the monk visit a historical remains and on sheer imagination seeks illusion and sees beautiful creatures dance and vanish in hallucination."

【鶴亀】：中国の説話から取られ、おめでたい時に演奏される。

"This "No" is taken from a Chinese story and played on lucky occasions."

【弱法師】：主眼は、能のうちで最も難しいと言われる盲目の舞である。

"The chief aim of this "No" play is the dance by a blind character which is said to be one of the most difficult performances in "No" dramas."

## 2. 分析

本章では、能曲それぞれについて作成された資料自体

を分析していきたい。数多くの例をあげながら、よく発生する間違い、勘違いに注目し、当時存在したどのような資料、本を利用して作られたかなどについて論じたい。

明治維新以降は能を含めて日本の文化、伝統を世界諸国に紹介する傾向があった。20世紀のはじめ頃から能についての説明書、ガイドブック、ならびに翻訳がどんどん発行され、例えば、ベアトリス・レーン・鈴木が「Nogaku - Japanese No Plays」の編者前書きで「(前略)本図書は東洋と西洋——つまり思想の古い世界と新しい行動——の間の好意と理解の大使となる。」<sup>(30)</sup>と述べたように、文化的な交流に注目した時代であった。1930年代から有名な能役者を中心とする演奏の録画のシリーズも発表された。最も有名な録画の一つは1935年の「葵上」に相違ない。シテは櫻間金太郎氏、英語のナレーション入りである。

### 【地名、人名に関して】

作者については百枚以上の説明のうち、一例しか指摘されておらず、しかも書き方としても、情報としても間違っている。「昭君」の場合「ENTAKE, Ujinobu」のように打ってあり、「禅竹」の最初の「Z」が欠けてしまい、「竹」の読み方は間違っている。しかし、「昭君」の作者としては現在の学説では「作者：不明(古作・金春系)」<sup>(31)</sup>、また「五音」に「王昭君 金春曲」としたのがこの能である。金春系統の古い能であろう。<sup>(32)</sup>と述べられる。しかし、当時『能楽源流考』において能勢朝次博士<sup>(33)</sup>は「昭君」を「氏信作(禅竹)」と述べておられたので、この作者の主張が必ずしも間違っていたとは言えない。

曲名を英語にするとき、直訳だけではなく、日本の名前、場所の説明も加えて翻訳することもよく見られる。例えば、「柏崎」は「The Town of Kashiwazaki」、「清経」は「Kiyotsune, the Warrior」、「張良」は「Cho Ryo, the Hero」、「邯鄲」は「Kantan, the Dreamland」などがある。ちなみに、固有名詞を説明する一方、普通名詞が固有名詞として扱われることもある。例えば、「景清」の場合、登場人物の「里人」をそのまま「satobito」と呼び、「吉野天人」の場合、同じく「女」は「onna」、「天人」は「tennin」と示す。もし、実際に日本人によって作成されたものなら、以上の単語の意味が分ったはずだ。また、「法華経」は英語の翻訳である「Lotus Sutra」ではなく、「Hokekyo」になっている。

説明で示す地名は詳しく、町、国などもよく指摘される。また、「芭蕉」、「岩船」などの場合、場所は「China」ではなく、「Morokoshi」と書いてある。当時のアメリカ人の検閲官は分ったかどうか疑問であるが、判断するのに不要の情報であったのだろう。同じように「張良」で「Chinese Emperor of Kan Era」と書かれてあるが、日本語以外に中国語の「Han Era」の方が使われる。さらに、日本の天皇は「富士太鼓」、「殺生石」などの場合、「Mikado」と称される。

場所が詳しすぎるのに対し、人名の場合は間違いが

多い。登場人物の一部しか示されないことが多い。また、前場・後場の関係が見えず、混乱している。両方に同じ人物が登場しても、違う役が書いてあることも少なくない。逆に、前場、後場で違う役であっても、解説からは分らないことがある。例えば、「鉢木」の場合「protagonist: Man (later, Sano Tsuneyo)」と記されるが、ずっとシテは佐野常世である。また、「自然居士」の場合は、「子方」ではなく、「Girl Character: A Girl」と書かれている（なお子方が少女なのは上掛りの特色<sup>(34)</sup>）。その上、「船弁慶」の「the ghosts of Tomomori and Heike」のような勘違いもあり、亡霊が二人以上登場するような説明である。「巻絹」のシテとして「Protagonist: Divine Goddess」と表示されるが、これだと「神々しい女神」のような意味である。

また、ある言葉は直訳し、ある言葉は逆に日本語のまままであげることもあり、その結果英訳内容が判然としなくなる例もある。例えば、「鉢木」は、梅・梅田、桜・桜井、松・松井田のように地名と植物名が同音であるところに面白味があるのだが、植物は翻訳され、地名は日本語のままである。地名の後「synonymous to the pot plants」と書いてあるものの、日本語が分らないと、植物と地名の関わりが分かるはずはない。

詞章を引用するとき、「熊野」以外元々の日本語の詩をローマ字で書いてから英語の翻訳が続く<sup>(35)</sup>。なお「熊野」は英語の翻訳しか書かれてない。

#### 【英語】

単語の簡単な綴りの間違いから複雑な文章作りまで不自然な英語が少なくない。スペルミス以外にも文法の間違いも多く、「花筐」で「overcomed」という誤った過去形を記し、正しい語形「overcame」ではない。また、第三人称につける「s」も欠けることがあり、単数と複数が同じ文章の中で混ざってしまうことも数多い。

さらに、「自然居士」の粗筋は簡単すぎる一方、文章として複雑すぎる「… after going through much hardships, he finally succeeds in bringing the girl back safely.」の説明がある。また、「賀茂」で「… both disappeared in the direction of Tadasu-no-Mori en route to the sky.」と述べられる。「砧」では、「… the poor wife became ill with the result that she subsequently passed away.」で、「小鍛冶」では「He worries himself over not having competent assistant without whom a good sword can not be made.」などと書いてある。

以上の例は、文法的な間違い（worries himself, without whom a good sword can not be made など）特に前置詞の間違い、日本語の直訳による英語で使わない表現（en route to the sky など）、スタイルが合わない単語の組み合わせ（subsequently passed away など）のような様々な誤りがある。

#### 【誤解された解釈】

以上引用した英語はおかしいが、記事内容に誤りがあ

るわけではない。しかし、間違った解釈もある。例えば、「鉄輪」の場合の短い説明をそのまま引用しよう。

“This “No” deals with the hatred of a woman who died. Her husband marries second wife. The ghost of the first wife appears as a dreadfully looking devil but she had to go away by virtue and benevolence of the Great Being.”

ということで、前の妻が亡くなり、登場するのはその亡霊だという。しかし、実際には生霊の役である。

#### 【フェノロサ・パウンドによる葵上】

「葵上」の場合は、おもしろい解釈がある。まず、粗筋の全体の翻訳を引用したい。（イタリック体にしたのは筆者。）

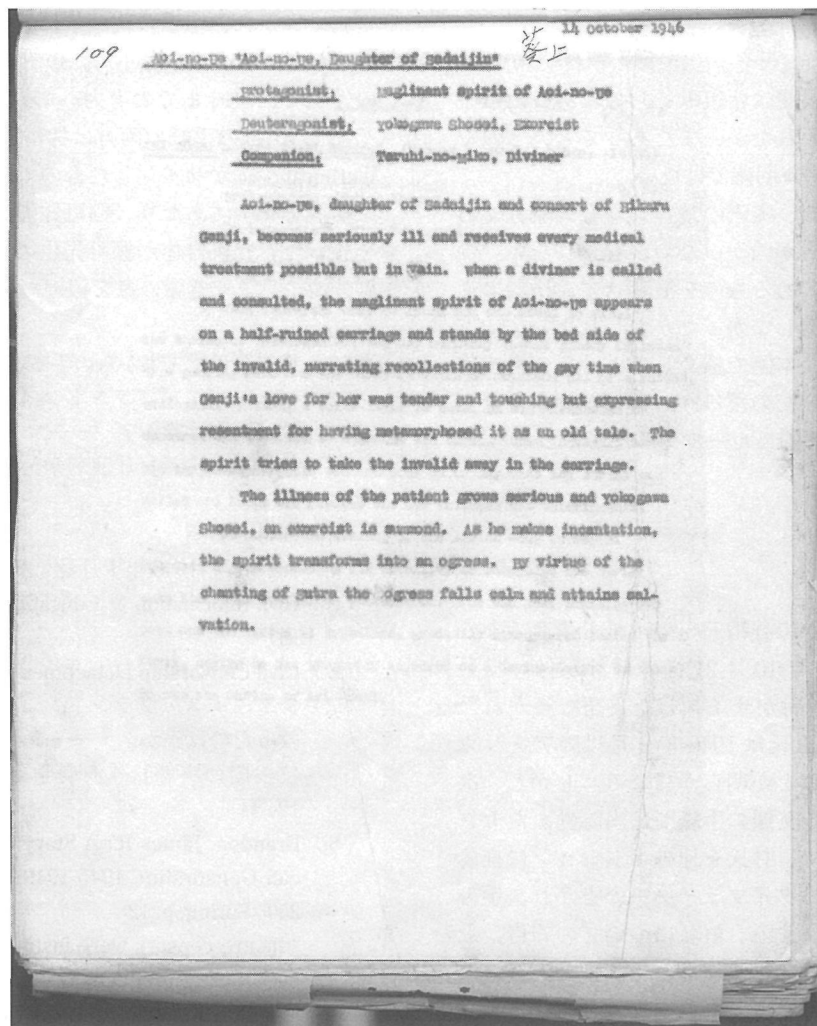
「左大臣<sup>(36)</sup>の娘、また光源氏の配偶者である葵上は重病にかかり、むなしくも様々な治療を受ける。占師が呼ばれると、半分荒廃した牛車によって葵上の悪霊が現れ、病弱者の枕元（ベッドの横）に立って、源氏の彼女への愛が優しく感動的であった時についての思い出を語るが、それが昔のこととなってしまった今は源氏を激しく怨んでいる。そして怨霊は病弱者を牛車で連れて行こうとする。

患者の病状は深刻になり、悪魔払いの祈祷師である横川小聖が召喚される。小聖が呪文を唱えるうち、怨霊は人食い鬼に変身する。しかし、経典読誦の功德により、霊鬼は落ち着き、魂が救済される。」

上に見えるように、六条御息所にまったく言及せず、代わりに葵上が二人いるかのごとくである。つまり、病気になったのも、怨霊も葵上である。また、資料には、曲名の翻訳は「Aoi-no-Ue, Daughter of Sadaijin (左大臣の娘の葵上)」<sup>(37)</sup>で、登場人物には「protagonist: maglicant<sup>(38)</sup> spirit of Aoi-no-Ue (シテ：葵上の悪霊)」と陳述される。

この説明に類似の解釈はフェノロサ (Ernest Fenollosa, 1853 ~ 1908)、パウンド (Ezra Pound, 1885 ~ 1972) の1917年「Noh' or Accomplishment」<sup>(39)</sup>、再刊では「The Classic Noh Theatre of Japan」(1959年)のタイトルとなった改作に見える。

フェノロサの翻訳では前ジテは「Apparition (怨霊)」とされ、「これは六条の御息所の怨霊なり」<sup>(40)</sup>の翻訳の「I am the spirit of Princess Rokujo」の所に脚注があり、「西洋の民間伝承と同様に、怨霊は初め豪華な偽装で現れることがよくある」<sup>(41)</sup>と説明する。それに対して、後ジテは「Hannya (般若)」と称する。しかしながら、「Apparition」も「Hannya」もパウンドにより利用された単語である。これについてパウンドは次のように述べている。「フェノロサ・平田による原稿には「最初の」怨霊を“六条御息所”と明記する。この怨霊は折り重ねた小



図：「葵上」の解説

袖に象徴される葵上を攻撃する。他のテキストはこの出現を“葵上”と呼ぶようだ（後略）<sup>(42)</sup>ということで、二人の葵上を登場させることはパウンド自身のアイデアであり、フェノロサの原稿には六条御息所も、葵上も登場したようだ。

さらに、フェノロサの翻訳文の前にあるパウンドによる前付けにはフェノロサの本文と異なる解釈がある。もちろん、この説明もフェノロサの原稿を基に作成されたものであるにもかかわらず、パウンド自身の考え方や誤解が解説に反映される場合も少なくない。前書きは、以下のように始まる。「次の葵上と杜若の二曲については、かなりの躊躇を感じるものあえて紹介する。明快（に解説できる）かどうか、自信がない——相談した日本人は中々手伝ってくれなかった。しかし、私がフェノロサの日本に関する記事の中で見つけたいくつかの文章は、それ自体きわめて意味明確なのだが、何物よりも美しいと感じるのである。これらは自分の確信である。この両曲について、自分が理解した限りの説明をしよう。」<sup>(43)</sup>と述べている。しかし、1921年に発行されたアーサー・ウェリーの「The No Plays of Japan」で「フェノロサは曲を誤解したようで、実際には存在しない複雑さや混乱が（作品中にあるとみなして）解釈した。」<sup>(44)</sup>と葵上の

翻訳に先立つ説明で述べている。

パウンドの葵上についての説明は、「話は、自分が理解した上、葵上（中略）は源氏の他の妻に対してねたみを持つ。」のように始まる。後半では、「曲は、葵上の死の床の場で始まる（後略）」と続く。また、「葵上をひどく苦しめるねたみの怨霊は、先ず六条御息所<sup>(45)</sup>の形で現れ、後に悪魔払いの成功により、ねたみの真髄はその人間的な怨霊から脱け出し、自分の誠の超人的な形（般若形）で現れる。」と書いてある。つづいて、次のように要約する。「舞台上の実際の六条御息所は、葵上自身のねたみの表象である。すなわち、葵上は自分の感情によって苦痛に陥る。この感情は最初に六条の怨霊の形で、それから超人的な形で取り憑く。」<sup>(46)</sup>とパウンドが述べる。その後、現代の心理学などについての説明や翻訳の難しさなども含めて、論じる。

以上からみて検閲のための「葵上」資料の原拠は、パウンドとフェノロサの説明、翻訳のようである。同じように検閲の資料より三十年ほど前に発表された「'Noh' or Accomplishment」で出てくる他の翻訳、解説も「'No' or Classic Dramas」に影響を与えたと推測されるが、「葵上」以外に類似点の一つもない。

## おわりに

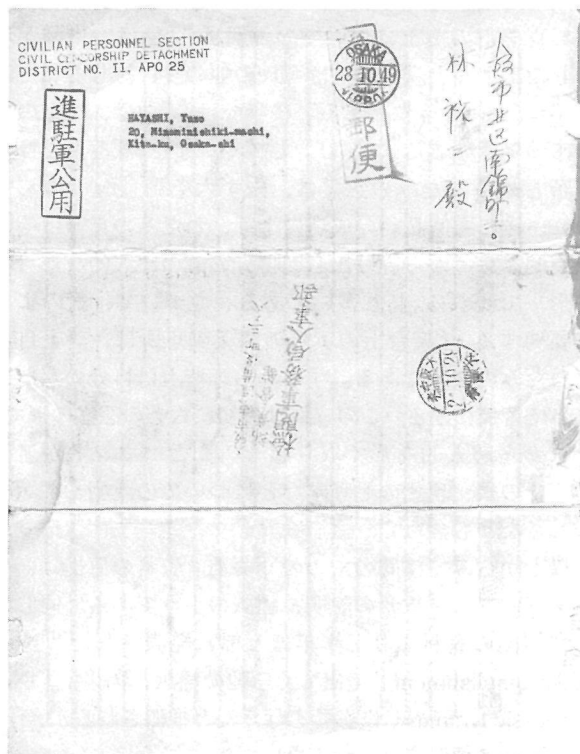
以上のごとく、能の検閲は仕組みとしてはあったらしい。しかし、実際に行われたか、またあっても、どのくらい厳しかったなどは中々明確ではない。

このような実際の検閲、実際の禁止よりも、演者である日本人の自己規制の方が強かったのかもしれない。つまり、問題になる恐れのあるものを演奏せず、検閲に通ると思ったものしか演奏しなかったのかもしれない。一方検閲する立場としては、本論で紹介したような資料を作成しなければならなかったのだろう。それが日本の全文芸分野に適用される普遍的なルールだったからである。

## 付録

### 林裕三氏について

能の資料と共に何枚かの林裕三宛の手紙も遺産のなかから見つかった。1949年10月21日の日付が付いていて、Harold W. Meyer 中尉がサインした英語で書かれた推薦状によれば、林裕三氏は1946年9月以降アメリカ検閲局に勤めたということが明らかになる。しかし、次の10月25日に書かれた英語の手紙では当時勤めたセクションが廃止になるため、林氏を他のポジションに推薦している。後者の手紙はタイプライターで書かれ、手書きの日本語の翻訳が付属する。解職についての報告、最後の給料と退職金を取りに行く指示、それまでの努力に対する感謝の三点を含む手紙である。退職金を受ける場所の手書きの地図も同封される。手紙は封筒に入れず利用されなかった用紙に包んで、宛先などはその用紙の



図：封筒の写真

裏側に書かれ、切手の代わりに「進駐軍公用」の判子が押されている。最後に10月31日の日付の「感謝の手紙」の件名で、当時までの努力への感謝を示す手紙がある。25日と31日の手紙の両方は林裕三氏宛てで、Charles T. Wetheral 少佐がサインしたものである。

本稿をなすにあたり、棚町知彌先生より数々の御指導を賜った。資料自体が棚町先生の御発見である。先生の御芳情に心より感謝の意を捧げたい。

注(1) 横道萬里雄先生からの手紙(2006年6月13日)

- (2) ジェームズ・ブランドン(鈴木雅恵訳)『歌舞伎を救ったのは誰か? ——アメリカ占領軍による歌舞伎検閲の実態』(『演劇学論集 紀要』42 2004年) 150頁
- (3) 『同』150頁
- (4) 『演劇界』1946年1月号 25頁
- (5) Civil Information & Education Section(民間情報教育局)
- (6) Civil Censorship Detachment(民間検閲支隊)
- (7) ジェームズ・ブランドン(鈴木雅恵訳)『歌舞伎を救ったのは誰か? ——アメリカ占領軍による歌舞伎検閲の実態』(『演劇学論集 紀要』42) 2004年) 194頁
- (8) Brandon, James R.: A Story of *Kabuki* during American Censorship, 1945-1949. *Asian Theatre Journal*. 2006 Spring, p. 12  
“theatre censors were instructed to exercise control over theatre productions of all types, professional and amateur. In practice, censors exempted *nō*, *kyōgen*, *kagura*, *bugaku*, and other ancient or ceremonial performance from examination, largely because their audiences were small. *Kabuki* was an important form of theatre to the censors because it had high visibility, played to large audiences, and was known to have suspect feudal content.”(筆者による翻訳)
- (9) 『金剛』156号 74-75頁
- (10) 『金剛』156号 54巻3号、75頁
- (11) 『同』74頁
- (12) 英文和訳として「支隊」だが、本隊のCISは日本人にとって極秘の機関であったから、「支隊」などいう用語を使うはずはなかった。(棚町知彌氏による。)
- (13) 棚町知彌氏の説明による。
- (14) 観世流のみで利用される曲名や文字使い「安達ヶ原」、「海士」、「仲光」、「草子洗小町」、「善界」
- (15) 『能・狂言辞典』平凡社、1987年、302頁
- (16) “The chief aim of this “No” play is Lion’s dancing, resembling to that of “Shakkyo”. No commission of vengeance is displayed on the stage and the Deuteragonist makes his exit while Lions dance is in full swing.”
- (17) 『能・狂言辞典』平凡社、1987年、147頁
- (18) 翻訳は、翻訳者の名前が明示されない場合、筆者が訳したものである。
- (19) Motokiyo Seami として示している
- (20) ジェームズ・ブランドン(鈴木雅恵訳)「歌舞伎を救ったのは誰か? ——アメリカ占領軍による歌舞

- 伎検閲の実態』『演劇論集紀要 42』2004 年、148 頁
- (21) 冒頭の能についての説明、「大仏供養」、「雲雀山」、「恋重荷」、「高野物狂」、「錦木」、「鶴」、「龍虎」、「七騎落」、「昭君」、「春栄」、「梅」、「雲林院」
- (22) 「海士」、「敦盛」、「張良」、「玄上」、「橋弁慶」、「杜若」、「小督」、「清経」、「熊坂」、「三輪」、「望月」、「野宮」、「接待」、「融」、「弱法師」
- (23) 「阿漕」、「二人静」、「放下僧」、「賀茂」、「三井寺」、「嫉捨」、「三笑」、「実盛」、「正尊」、「知章」、「木賊」、「経政」、「鵜飼」、「頼政」
- (24) 「融」・「神歌」は同じく 20 番、「海士」・「定家」は 56 番、「清経」・「経政」は 118 番である。
- (25) ジェームズ・ブランドン（鈴木雅恵訳）「歌舞伎を救ったのは誰か？ ——アメリカ占領軍による歌舞伎検閲の実態』『演劇論集紀要 42』2004 年、p. 193、注 5
- (26) *The Occupation of Japan: Arts and Culture. The Proceedings of a Symposium at Norfolk, Virginia, 18-19 October 1984.* p. 203  
 “We bothered no and bunraku less. Bunraku’s feudal scenes were censored, but that artform involved unreal puppets. No one cared about no because it was so antique people didn’t understand it.”
- (27) 「同」p. 202  
 “… as far as the Occupation was concerned *no* and *bunraku* were just irrelevant and were ignored. *Kabuki*, on the other hand, was seen to be very sinister and a real threat to the re-education of the Japanese people, and therefore the Occupation came down very hard on it.”
- (28) 「松風」、「通小町」、「班女」、「金輪」で、この四曲は全て一枚で一緒になっている。
- (29) 12 日「水無月祓」- 13 日「烏帽子折」、「女郎花」
- (30) Beatrice Lane Suzuki: *Nogaku- Japanese No Plays.* London, 1932. p. 7  
 “… these books shall be the ambassadors of goodwill and understanding between East and West – the old world of Thought and the new of Action.” (p. 7)
- (31) 「能・狂言辞典」平凡社、1987 年、75 頁
- (32) 横道萬里雄・表章「謡曲集 上」日本古典文学大系 40、岩波書店、昭和 48 年、166 頁
- (33) 能勢朝次「能楽源流考」、岩波書店、昭和 13 年、1327 頁
- (34) 岩波講座『能・狂言 VI』、1989 年、323 頁
- (35) これらは、「梅」、「雲林院」、「遊行柳」の三つの場合に見える。
- (36) 英語の資料でも“Sadaijin”と書いてある。
- (37) フェノロサ・パウンドは、“Awoi no Uye”という書き方を利用する。
- (38) 正しくは、“malignant”（有害な）であるが、二回も綴りが間違っって“maglinant”と書いてある。
- (39) ‘Noh’ or Accomplishment – A Study of the Classical Stage of Japan by Ernest Fenollosa and Ezra Pound. Macmillan and Co., Limited, London, 1916（年号は間違っている、実際は 1917 年）
- (40) 『謡曲集・上』日本古典文学大系 40、岩波書店、昭和 48 年、127 頁
- (41) Pound, Ezra & Fenollosa, Ernest: *The Classic Noh Theatre of Japan.* New Directions, 1959, p. 117  
 “As in Western folk-lore, demons often appear first in some splendid disguise.”
- (42) 『同』、p. 115  
 “The Fenollosa-Hirata draft calls the manifest spirit ‘The Princess Rokujo’, and she attacks Awoi, who is represented by the folded kimono. Other texts seem to call this manifestation ‘Awoi no Uye’, …”
- (43) 『同』、p. 113  
 “I give the next two plays, Awoi no Uye and Kakitsubata, with very considerable diffidence. I am not sure that they are clear; Japanese with whom I have discussed do not seem able to give me much help. Several passages which are, however, quite lucid in themselves, seem to me as beautiful as anything I have found in Fenollosa’s notes, and these passages must be my justification. In each case I give an explanation of the story so far as I understand it.”
- (44) Waley, Arthur: *The No Plays of Japan.* London, 1921. p. 180  
 “Fenollosa seems to have misunderstood the play and read into it complications and confusions which do not exist.”
- (45) “Rakujo” と書いてあるが、他の場合は“Rokujo”で、一回の入力ミスに相違ない。
- (46) Pound, Ezra & Fenollosa, Ernest: *The Classic Noh Theatre of Japan.* New Directions, 1959, ps. 113-115  
 “… Awoi is tormented by her own passion, and this passion obsesses her first in the form of a personal apparition of Rokujo, then in demonic form.”

#### 参考文献

- Hirano, Kyoko: *Mr. Smith Goes to Tokyo-Japanese Cinema under the American Occupation, 1945-1952.* Smithsonian Institution Press, Washington and London, 1992
- 平野共余子『天皇と接吻——アメリカ占領下の映画検閲』草思社、1998 年
- Okamoto Shiro – Leiter, Samuel L.: *The Man Who saved Kabuki – Faubion Bowers and Theatre Censorship in Occupied Japan.* Univ of Hawaii Press, Honolulu, 2001
- Brandon, James R. (鈴木雅恵訳)「歌舞伎を救ったのは誰か？ ——アメリカ占領軍による歌舞伎検閲の実態』『演劇学論集 紀要 42』特集演劇と記憶 2004、日本演劇学会
- Brandon, James R.: *A Story of Kabuki during American Censorship, 1945-1949.* Asian Theatre Journal. 2006 Spring
- The Occupation of Japan: Arts and Culture - The proceedings of a Symposium at Norfolk, Virginia, 18-19 October 1984*
- Pound, Ezra - Fenollosa, Ernest: *The Classic Noh Theatre of Japan.* USA, New Direction Books (1st published: USA, 1917 (1916) as ‘Noh’ or Accomplishment, a study of the classical stage of Japan), 1959
- Fenollosa, Ernest – Pound, Ezra – Yeats, W. B.: *Certain Noble Plays of Japan: from the manuscripts of Ernest Fenollosa, Chosen and Finished by Ezra Pound with an introduction by William Butler Yeats.* The Cuala Press, Churchtown,

- Dundrum, 1916, reprinted: Irish Univ. Press, 1<sup>st</sup> ed: 1916.,  
1971
- 西野春雄・羽田昶 (編) 「能・狂言辞典」平凡社、1987
- Suzuki, Beatrice Lane (translation): Nogaku-Japanese Noh  
Plays. London, John Murray, 1<sup>st</sup> ed., 1932
- Nogami Toyochiro: Japanese Noh Plays. Tourist Library: 2,  
1935
- Walley, Arthur (translation): The No Plays of Japan. London,  
1921
- 横道萬里雄・表章「謡曲集 上下」日本古典文学体系 40・  
41、岩波書店、昭和 44 年
- 伊藤正義「謡曲集 上中下」新潮日本古典集成 57・58・59、  
新潮社、1983 年
- 「能・狂言 第 2・7 卷、別巻」岩波講座、1992 年
- 「メリーランド大学所蔵プランゲ文庫展記念図録」2000 年
- 『山口県史 別巻 3』巖南堂書店、1989.3
- 横手一彦『棚町知弥氏に福岡検閲局時代を聞く』平和文化  
研究 第 27 集 (2005 年 3 月 31 日)
- 『金剛』156 号、平成 11 年
- 『平和文化研究』長崎総合科学大学・長崎平和文化研究所、  
第 28 集

No.	ローマ字曲名	英語の曲名	日本語の曲名	日付	番号	日本語も許可
"No" or Classic Dramas				1946/ 9/22		
60	Matsukaze		松風	1946/10/ 1	48	
61	Kayoi Komachi		通小町	1946/10/ 1	24	
62	Hanjo		班女	1946/10/ 1	4	
63	Kanawa		鉄輪	1946/10/ 1	133	
5	Aoi-no-Ue	Aoi-no-Ue, Daughter of Sadaijin	葵上	1946/10/14	109	
8	Ataka	The Ataka Barrier	安宅	1946/10/14	87	
14	Dojoji	Dojoji Temple	道成寺	1946/10/14	104	
35	Izutsu	The Railing of the Well	井筒	1946/10/14	13	
49	Kogo	Kogo, a Maid of Honour	小督	1946/10/14	129	
53	Kosode Soga	Soga Brothers	小袖曾我	1946/10/14	25	
54	Kiyotsune	Kiyotsune, the Warrior	清経	1946/10/14	118	
55	Kumasaka	Kumasaka, the Robber	熊坂	1946/10/14	128	
67	Miwa	Miwa, Town in Yamato	三輪	1946/10/14	86	
78	Ohara Goko	Visit to Ohara	大原御幸	1946/10/14	33	
90	Settai	Invitation	接待	1946/10/14	195	
111	Tooru	Tooru, a Noble Man	融	1946/10/14	20	
113	Tsuchigumo	The Ground-Spider	土蜘蛛	1946/10/14	152	
4	Ama	The Fisherwoman	海士	1946/10/25	56	
9	Atsumori	Atsumori - Hero of Medieval Age	敦盛	1946/10/25	107	
28	Hashi Benkei	Benkei on the Bridge	橋弁慶	1946/10/25	127	
43	Kashiwazaki	The Town of Kashiwazaki	柏崎	1946/10/25	29	
75	Nonomiya	A Place of Historic Interest	野宮	1946/10/25	98	
19	Fuji Daiko	Fuji, the Drum Beater	富士太鼓	1946/10/28	70	
37	Kagekiyo	A Heike Warrior	景清	1946/10/28	42	
107	Tatsuta	The Shrine of Tatsuta	龍田	1946/10/28	61	
122	Yama Uba	The Matron of Mountains	山姥	1946/10/28	75	
18	Eguchi	Eguchi, the Woman Entertainer	江口	1946/10/29	3	
99	Shunkan	Shunkan, the Abbot of Hoshoji Temple	俊寛	1946/10/29	47	
24	Hachi-no-Ki	The Pot plant	(鉢木)	1946/11/26	102	
69	Momiji Gari	Maple Gathering	(紅葉狩)	1946/11/26	10	
94	Sho Jo	Orangutan	(猩猩)	1946/11/26	90	
121	Uto-O	Name of Bird said to possess deep affection towards young birds	善知鳥	1946/11/26	94	
32	Ikkaku Sennin	The Superhuman Being	一角仙人	1946/11/29	187	
44	Kasuga Ryujin	The Dragon God of Kasuga	春日龍神	1946/12/ 2	66	
91	Shakkyo	The Stone Bridge	石橋	1946/12/ 2	155	
106	Teika	Lord Teika	定家	1946/12/ 3	56	
11	Chikubu-Shima	Chikubu-shima Island	竹生島	1947/ 1/28	26	
56	Kurama Tengu	The Long-nosed Mountain Spirit of Kurama	鞍馬天狗	1947/ 1/28	59	
110	Tomoe	Tomoe, the Heroine	巴	1947/ 1/28	120	
40	Kami-Uta	Auspicious Song	神歌	1947/ 1/29	20	
25	Hagoromo	The Feather-Robe	羽衣	1947/ 2/10		日
26	Hanagatami	The Memento of Flowers	花筐	1947/ 2/10		日
36	Jinen-Koji	Jinen-Koji, the Preacher	自然居士	1947/ 2/10		
51	Kokaji	Kokaji, the Swordsmith	小鍛冶	1947/ 2/10		日
88	Sessho Seki	The Killing Stone	殺生石	1947/ 2/10		日
104	Takasago	The Beach of Takasago	高砂	1947/ 2/10		日
105	Tamura	Tamura Maru, the Hero	田村	1947/ 2/10		日
116	Tsuru Kame	The Crane and Tortoise	鶴亀	1947/ 2/10		日
131	Yuya	Yuya, Munemori's Lover	熊野	1947/ 2/10	38	日
12	Cho Ryo	Cho Ryo, the Hero	張良	1947/ 3/ 6	131	

23	Genjo	Genjo, on the Chord	玄上	1947/ 3/ 6	172
39	Kakitsubata	Kakitsubata, the Iris	杜若	1947/ 3/ 6	43
68	Mochizuki	Mochizuki, the Murderer	望月	1947/ 3/ 6	
126	Yoroboshi	The Blind Priest	弱法師	1947/ 3/ 6	171
2	Aisome-gawa	Aisome River	藍染川	1947/ 4/ 4	134
20	Fujito	Fujito Ferry	藤戸	1947/ 4/ 4	40
87	Semi Maru	Prince Semi Maru	蟬丸	1947/ 4/4	89
129	Yugao	The Convolvulus	夕顔	1947/ 4/4	63
38	Kagetsu	The Boy Kagetsu	花月	1947/ 4/8	124
79	Ooyeyama	Ooye Mountain	大江山	1947/ 4/8	162
6	Ari Doshi	Ari Doshi Shrine	蟻通	1947/ 5/ 7	36
7	Ashi Kari	The Reed Vender	芦刈	1947/ 5/ 7	106
15	Domyoji	Domyoji Temple	道明寺	1947/ 5/ 7	117
70	Morihisa	Morihisa, the Captive	盛久	1947/ 5/ 7	92
100	Sotoba Komachi	The Belle of the Stupa	卒塔婆小町	1947/ 5/ 7	9
58	Kuzu	Kuzu River	国栖	1947/ 5/ 8	196
103	Tadanori	Tadanori, Poet of Medieval Age	忠度	1947/ 5/ 8	37
114	Tsuchi Guruma	The Mud Lorry	土車	1947/ 5/ 8	194
1	Adachi-ga-Hara	Adachi-ga-Hara, Plain at Mutsu	安達ヶ原	1947/ 6/12	
21	Funa Benkei	Benkei on the Boat	船弁慶	1947/ 6/12	
41	Kamo	Kamo Shrine	賀茂	1947/ 6/12	
71	Nakamitsu	Fujiwara Nakamitsu	仲光	1947/ 6/12	
82	Rodaiko	The Drum of Prison	籠太鼓	1947/ 6/12	
125	Yorimasa	Warrior Yorimasa	頼政	1947/ 6/12	
83	San Sho	Three Laughs	三笑	1947/ 6/27	
95	Shozon	Shozon, the Betrayer	正尊	1947/ 6/27	
108	Tomoakira	Tomoakira, Warrior of Heike Clan	知章	1947/ 6/27	
86	Sakuragawa	Sakuragawa River	桜川	1947/ 7/13	
124	Yashima	Yashima, Seat of Genpei Battle	八嶋	1947/ 7/15	
118	U-Kai	The Coromorant Fishing	鶺鴒	1947/ 7/27	
77	Obasute	Obasute Mountain	姨捨	1947/ 8/5	
22	Futari Shizuka	The Two Princesses Shizuka	二人静	1947/ 8/6	
30	Hokazo	Strolling Monk	放下僧	1947/ 8/6	
109	Tokusa	The Scouring-Rush	木賊	1947/ 8/6	
3	Akogi	Fisherman Akogi	阿漕	1947/ 8/25	
27	Hashitomi	Half-hanged Awning	半蔀	1947/ 8/25	
64	Miidera	Miidera Temple	三井寺	1947/ 8/25	
84	Sanemori	Sanemori, a Warrior of Medieval Age	実盛	1947/ 8/25	
72	Naniwa	Naniwa alias Osaka	難波	1947/ 9/18	6
115	Tsunemasa	Tsunemasa, Warrior of Heike Clan	経政	1947/ 9/18	118
31	Hyakuman	Madwoman Hyakuman	百萬	1947/10/ 2	
45	Kazuraki	The Goddess of Kazuraki	葛城	1947/10/ 2	
65	Matsumushi	Calytocyphus-Marmoratus or Cricket	松虫	1947/10/ 2	
102	Sumida-Gawa	Sumida River	隅田川	1947/10/ 2	
132	Zegai	Monk Zegai-Bo	善界	1947/10/ 2	
33	Ikuta Atsumori	Atsumori of Ikuta	生田敦盛	1947/10/ 6	
57	Kusu-no-Tsuyu	The Dew of Kusunoki	楠露	1947/10/ 6	
89	Senju	Senju, the Waiting Maid	千手	1947/10/ 6	
59	Makiginu	Makiginu, Rolled Silk	卷絹	1947/10/15	
101	Shunzei Tadanori	Lord Shunzei and Tadanori, Poet	俊成忠度	1947/10/15	
123	Yo-Ki-Hi	Yo-Ki-Hi, Queen Consort	楊貴妃	1947/10/15	
74	Nomori	Peasant	野守	1947/11/17	
128	Youchi Soga	Soga Brothers in Night Attack	夜討曾我	1947/11/17	
42	Kantan	Kantan, the Dreamland	邯鄲	1947/11/20	
47	Kinuta	Fulling Mallet	碓	1947/11/20	



130	Yugyo Yanagi	The Yugyo Willow	遊行柳	1947/11/20		
10	Basho	The Banana Plant	芭蕉	1947/12/ 8		
119	Uta Ura	Poem Divination	歌占	1947/12/ 8		
16	Ebira	Quiver	箆	1947/12/22		
46	Kin Satsu	Gold Tablet	金札	1947/12/22		
97	Soshi Arai Komachi	Komachi's Obliterated Poem	草子洗小町	1947/12/22		
127	Yoro	Yoro Waterfall	養老	1947/12/22		
93	Shichiki Ochi	Seven Fugitive Warriors	七騎落	1948/ 1/12		許可
96	Shokun	Princess Shokun	昭君	1948/ 1/12		許可
92	Shirahige	Shirahige Shrine	白髭	1948/ 2/ 3		
34	Iwafune	The Rock Boat	岩船	1948/ 3/ 1		
48	Kiso	Kiso. Hero of Medieval Age	木曾	1948/ 3/ 1		
13	Daibutsu Kuyo	The Daibutsu Offering	大仏供養	1948/ 3/26		
29	Hibariyama	Mount Skylark	雲雀山	1948/ 3/26		
73	Nishikigi	Brocaded Tree	錦木	1948/ 3/26		
76	Nue	Chimera	鵄	1948/ 3/26		
117	Ume	Plum	梅	1948/ 3/26		
120	Un-Rin-In	Unrinin Tempe	雲林院	1948/ 4/15		
85	Ryo Ko	Dragon and Tiger	龍虎	1948/ 4/29		
98	Shunei	Shunei, the prisoner	春栄	1948/ 8/ 9		
112	Torioibune	The Bird Chasing Boat	鳥追舟	1948/ 9/20		
52	Koya Monogurui	Insanity at Koya	高野物狂	1948/12/ 4		日
81	Rinzo	The Sacarium	輪蔵	1949/ 3/ 7		
133	Zenji Soga	The Priest Soga	禪師曾我	1949/ 3/ 7		
134	Kotei		皇帝	1949/ 3/31	71	
135	Yoshino Tennin		吉野天人	1949/ 3/31	141	
66	Minazuki Harai	June Shinto Exorcism	(水無月祓)	1949/ 9/12		日 許可
17	Eboshiore	Eboshi Hat	烏帽子折	1949/ 9/13		日 許可
80	Ominameshi	Patrinia Scabiosaefolia	(女郎花)	1949/ 9/13		日
50	Koi no Omoni	Love's Heavy Burden	恋重荷	11月 9日		

狂言 棒縛  
狂言 千鳥  
狂言 鳴子  
狂言 蝸牛  
狂言 狐塚  
狂言 泣尼

括弧にある曲名は、解説では日本語で書かれていない。